

情報と
お知らせ

温もりを届けたい、手からこころへ……

たまちゃん通信

日本のお手玉の会本部

〒792-0013 愛媛県新居浜市泉池町10番1号
TEL0897-32-0302 FAX0897-32-0311

『れきハコ』は若返る“玉手箱” 日本のお手玉の会理事 武田信之

*歴史を詰めた「れきハコ」

テレビから、「レキハコ」という、聞きなれない言葉が流れた。「なんだろう?」、画面を見た。それは、富山の薬売りの荷物を連想させる、紺の袋に包まれた箱のことで、愛媛県歴史文化博物館の学芸員が、県内の介護施設に持ち込んだものだった。

学芸員は、「これは『れきハコ』(歴箱)といって『歴史の玉手箱』です」と説明していた。箱の中には、懐かしい「小學國語讀本」「尋常小學唱歌」などの教科書や、鳴子、お手玉など、昔の生活用具がたくさん入っていた。

施設のお年寄りは、ニコニコしながら、箱の中から思い思いの物を取り出す。教科書を開いて、「サイト サイト…」と声を出して読む人。「ポッポッポ ハト ポッポ…」と歌う人や、鳴子を振ったり、お手玉をゆったり、みなさん明るい表情で楽しんでいた。

*認知症の人を笑顔にした

そんな中に、みんなの輪から外れ、無表情で座わる女性がいた。80歳半ばの認知症の女性だった。その人に施設の職員が、2個のお手玉を渡した。すると、女性は、しばらく手に持ったお手玉を眺めていたが、やおら2個のお手玉をゆり始めた。笑みを浮かべるやさしい表情に変わった。

そして、教科書を読んでいる人たちの仲間に入り、一緒に唱歌を歌い、国語の読本を読んだ。仲間のみなさんから、「上手だね」と声をかけられた。それに対して、「若い時は、小学校の教師をしていたの…」と、認知症の女性が笑顔で答えた。

「これから唱歌を教えて…」と、みんなから乞われていた。女性の表情はさらに明るくなった。昔の生活を再体験することで、記憶がよみがえり、元気になる過程を見ることができた。これが「れきハコ」による「回想法」で、最近、介護施設で人気を呼び、貸し出しが増えているそうである。

番組の最後に、学芸員は「浦島太郎の『玉手箱』は、蓋を開けると老人になりました。『歴史の玉手箱・れきハコ』は、開くと若返るのです」と話していたのが印象的だった。

*70年ぶりのお手玉に涙

私にも、それに似た体験がある。23年前のこと。ボランティアグループの新居浜アメニティ倶楽部(初代会長は「泉」同人の宇和宣さん)で、お手玉の普及活動に取り組むことを検討していたときのことだ。市内の老人ホームを訪ねた。

80歳過ぎの女性3人に、お手玉を渡して、遊び方などを聞いた。が、「もう、忘れまして」との返事。仕方なく話題をホームで人気のカラオケの話に変えた。ところが、しばらくすると女性の手が動き、お手玉が弾みだした。

3人は立ち上がり、3個のお手玉をゆりながら、「一かけ、二かけ、三かけて…」と歌った。ひとしきりして、「お手玉は、70年振りぶりです。すっかり忘れていたのですが、体が覚えていてくれたのですね。ありがとうございました」と、涙を流された。

この感動の涙が、私たちに、お手玉遊びの普及活動を決断させてくれた。それが起爆剤となり、「新居浜発、全国・世界行き」の日本のお手玉の会の活動が、スタートしたのだった。

*孫世代との交流に昔遊び

いまお手玉遊びは、幼稚園、小学校など教育の現場や介護施設、公民館活動で、広く採用されている。お手玉にかぎらず、竹馬、コマ回しなど、祖父母世代の私たちが、子どものころに体験した遊びを再体験するとともに、孫世代との交流の素材として使い、伝承していくことが、求められている。

そうした行動をとおして、明るい、「心豊かなまちづくり」につないでいきたい。『れきハコ』のテレビ番組を見ていて、そんなことを感じた。



日本のお手玉の会
2代目 会長

俳句誌『泉』・喫泉に掲載された日本のお手玉の会理事の武田さんは、本会の2代目会長を努められました。武田さんのご自宅を訪問しますと、書齋には三方の壁全体にあらゆる書籍で埋め尽くされています。一番関心することは、蔵書の多くに、著者自筆のサインを必ずいたたくことです。「念ずれば花ひらく」を信じて、この著者に会いたいと思っじて書籍を求められるそうです。

住友化学に在籍中から長いお付き合いを通じて、数えきれない本の山を拝見するたびに、関心するばかりです。また、ご自身のインターネットのブログには読まれた本の感想や紹介も含め、アクセス数は万を超えています。そんな、武田さんは78歳を迎えながらも、日本のお手玉の会を大切に思い、依頼されるさまざまな内容に応じてお手玉の魅力を紹介しています。左の「れきハコ」は、その一部を掲載させていただいたものです。読んでみてください。

日本のお手玉の会 事務局